

ASLE-K と ASLE-J との対話:「環境」による日韓架橋の可能性

ASLE-K 院生組織 Kang Yeon Haun, Lee Kang Sun, Lee Young Hyun (成均館大学・院)

ASLE-J 院生組織 中村優子、森田系太郎、山本洋平 (立教大学・院)

1. 概要

韓国と日本は隣国同士でありながら、歴史、それも特に近代の歴史の中で人々に蓄積されてきた文化・言語・国民性などにおける差異が、両国をつい最近まで遠い存在にし続けてきた。周婉窈は「東アジア諸国の相互認識は、観光と大衆文化のレベルにとどまったまま」とため息を漏らす(35)。

過去の植民地支配の関係で、日本の大衆文化の韓国への流入が正式に自由化されたのは1998年10月であり、金大中大統領の訪日が契機であった。この第1次自由化で漫画・雑誌の輸入等が自由化された後、99年に第2次(映画祭受賞作の上映等)、2000年に第3次(アニメ・ビデオ等)、2004年に第4次(CD・映画・ゲーム等)と進んでいる。また日本国法務省が平成19年1月に発表した「平成18年における外国人入国者及び日本人出国者の概況について(速報)」によると、「平成18年外国人正規入国者(再入国許可入国を含む)上位10ヶ国」においても「平成18年外国人新規入国者上位10ヶ国」でも、ともに韓国がトップである。

一方で、2006年12月9日に日本の内閣府発表の世論調査結果を朝日新聞が報じたところによると、日韓関係が良好だとは思わないと答えた日本人は、調査を開始した86年以降で過去最悪の57.1%にのぼった。2002年以降はワールドカップの共催や韓流ブームで親近感を感じる人が増えていたが、首相の靖国神社参拝や、独島・竹島をめぐる対立が影を落としたようである、と同記事は述べる。

世界的な建築家である安藤忠雄は「あらゆる意味でのコミュニケーション不足が、現代の日本社会の抱えるさまざまな問題の根源にある。環境問題という、とかく大きさに考えられがちだが、大切なのは一人ひとりが心の交流を思い出し、自分と周りの関係を確かにすることだ」と述べている。一方で Martin と Nakayama は、異文化関係向上のコツとして「対話」と「関係構築」を挙げている(432)。

本パネルでは、ASLE-K の大学院生が日本環境文学(石牟礼道子・山尾三省・宮沢賢治)(ASLE Japan, 2007)と、そして ASLE-J の大学院生が韓国環境文学(Hyonjong Chong・Kim Chiha・Seungho Choi)(Kim 編訳, 2006)と向き合い、それに基づき対話をすることで、「環境」というキーワードが両国を架橋し、よりよい関係を構築する可能性を探る。

2. 発表概要

<パート I : ASLE-J 院生組織による発表>

1. 二つの線:「Hyonjong Chong 作“*That Curved Line*”が描くもの」(中村優子)

【自然界の線: *curved*】この詩のキーワード *curved* のディオネーション(註: パルトは、記号はディオネーション[明示の意味]とコネーション[潜在的意味]を持つとした。本稿ではこれを基に、言葉の意味を考察した。)は、草を食む牛と馬の首や胴体の線か。だが“自然界にある線を象徴化したもの”も二次的にディオネートすると考える。直線は自然界にはない。“自然な線”とは曲線である。だが単に曲線というなら、*a curve* でよい。この詩に出てくるのは *curved* で、自ら曲がった、あるいは神のような超越的存在に曲げられた線を示唆する。

【牛と馬の意味】役獣として歴史のある牛は、鈍重だが従順で力強く、田畑を耕して恵をもたらす動物として愛され、様々な文化圏で平和の象徴とされて来た。これに対して俊足な馬は戦闘に利用されたとの説もある。牛と馬はこの点から、平和/戦争、農民・平民/兵士・官僚という対立的なものを象徴し得る。この詩ではその2つが、1つの場所で共に草を食む。対立しあうものがない、全てが平和に共存している世界だ。

【*The lines* と *that curved line*】動物や自然界の曲線たちを詠う第1から3節では *the lines* と複数形。だが最終節の *that curved line* は単数。*that* であることから、目の前にある *this* ではなく遠い所、もしくは記憶やイメージの中にあるものを示すと考えられる。前述の分析と合わせると、全ての生き物が健やかな循環の中にある姿、すなわち生態系の円環関係を象徴したため、この部分のみ1つの線をコネートし、よって単数となったと考える。

2. 二つの思想「Kim Chiha 再読—政治的コミットメントと環境意識の架け橋」(山本洋平)

Kim Chiha(金芝河、キム・ジハ)は、1970年代の独裁政権に対する抵抗運動に深く関わり、「政治的詩人」として知られてきた。それから30年以上経た現在、「環境詩」のアンソロジーに名を連ねられている。「政治」から「環境」への転向。政治的メッセージと詩的想像力の両側面をキャリアのうちに変幻させると事態はキムに限らず、ヘンリー・ソロー、エドワード・アビー、森崎和江、山尾三省のような作家に共通する特徴と言える。多くの自然志向の作家が示す政治性と詩学との緊張関係を念頭におきながらキム・ジハを再読する。昨年度ワークショップでの議論を復習したうえで、“*Cracking the Shell*”と“*In the Past*”を中心に扱う。

3. 二つの自然「Seungho Choiを読む:〈外なる自然〉と〈内なる自然〉をつなぐ試み」(森田系太郎)

本発表では、「ポスト・モダンの詩」「解体詩」「解体主義の詩」(金・佐川 22)を書く韓国環境詩人・Seungho Choi(崔勝鎬、チェスンホ)の詩「コンビナート」を取り上げ、そこに見られる Choi の〈外なる自然〉(＝自然環境)と〈内なる自然〉(＝身体)をつなぐ試みを浮き彫りにする。

詩では2つの点に注目したい。第1に、同詩は近代社会の手による環境破壊に対して批判を行っている。詩には近代の環境破壊を指示する記号が次々と登場する。そして詩の中で破壊されるのは〈外なる自然〉ばかりではない。「母」「子」に象徴される身体という〈内なる自然〉も同様だ。Wu はこれを「身体の植民地化」と呼ぶ(xiv)。

第2に、この詩が私に想起させたのが日本の詩人の伊藤比呂美である。「性」をテーマにした詩が多い伊藤は「胎児はうんこである」と喝破した。Choiとは1歳下の同世代同士である。「髪」「乳(房)」「子宮」という〈内なる自然〉は、ラディカルな環境詩人である Choi と伊藤に共通する詩の材料である。

纏めると、産業社会(「コンビナート」「廃液」「プラスチックのコード」「煙突」「ゴム)、身体(「子ども」「母」「乳房」「臍」「脳」「子宮」「頭皮」「髪)、ジェンダー・セクシュアリティ(「母」「乳房」「レイプ」「子宮」「子」といった記号を用いながら、Choi は「コンビナート」という詩において〈外なる自然〉と〈内なる自然〉という2つの自然をつなぐ試みを行っている。

「環境」というとついわたしたちは〈外なる自然〉ばかりを思い浮かべがちであり、従って環境文学でも〈外なる自然〉に焦点が当てられがちである。しかしこれからの環境文学は、〈外なる自然〉のみならず〈内なる自然〉、つまり性というテーマも含めた身体論にも同時に焦点を当てていく必要があることを本発表では強調したい。

<パートII:ASLE-K院生組織による発表>

1. 石牟礼道子『苦海浄土』における文学技巧の分析(LEE Kang Sun)

『苦海浄土—わが水俣病』において、環境汚染は自然だけでなく人間をも破壊すると作者は強調する(ASLE-Japan 5-47)。本発表ではその文学技法を分析する。

ここで指摘したいのは、『苦海浄土』には三つの視点が用いられている点である。一つ目は水俣病患者の視点であり、二つ目は親日窒水俣肥料株式会社および日本政府、そして結核病患者(「肺病さんたち」)の視点である。水俣病の存在をめぐっては、前者の組織側は否認し、結核病患者は軽視しており、水俣湾の住民でない人々は無関心である。三つ目は病院及び医療に関する報告と報道記録を伝える新聞の視点である。作者の意図は、第二の視点をもつ人びとに環境危機を認識させることだ。この目的を達成するべく意識の流れを用いたり、フラッシュバックの技巧を通じて、以前の海と現在の海のコントラストを示したりすることで、作者は水俣病の過程を描き出す。水俣病の余波一つまるところ人間性の崩壊—は、医療報告と報道記録によって後押しされる。その報告と記録は、短く冷酷でありながら正確で完全に客観的であり、水俣病の存在や、汚染の致命的影響、人間の身勝手さの結末を証明するものである。つまり、「ゆき」の意識の流れが人間性を失っていく内的なプロセスを示す一方、大学病院の科学的な報告は彼女の意識が崩壊する原因を立証する、という訳である。

2. 山尾三省を読む(LEE Young Hyun)

山尾三省の思想は「リアルな生活」に基づいていた。共同社会のリーダーあるいは耕作者として、彼は自分自身の手によってエコロジカルな生活を実践した。詩集『びろう葉帽子の下で』の「あとがき」によれば、社会の最下層の耕作者になろうという彼の夢は、皆がこぞって高みに這い上がりたいたいというような資本主義の原理を受け入れない決意を示している(ASLE-Japan 62-64)。

「あとがき」にあるように、彼は「手の文化」に価値をおいているが、それに代って「単一単相の物理化学文明がこの地球上を覆い尽くそうとしている。」われわれにとってそれは惨事にちがいない。「単一単相」の社会に生きるのは破壊的なものになるだろうと作者は主張する。

「二十四節気の風景」(ASLE-Japan 67-68)では、時間概念の二つの極(「線的な時間」「円環的な時間」)が比較される。実感としての時間概念とは、作者が表現するところによれば「文明化の線的な時間」ということになる(ASLE-Japan 67)。この時間概念の特徴のひとつは、それが「進歩」という現代的価値に支えられているということである。上記の二つの時間概念を比較することによって、本当にわれわれは過去より現在のほうが幸福なのか、と作者は問いかけている。この問いに賛成だと答えられる人はそう多くあるまい。

「五つの根 について」(ASLE-Japan 69)では、通常われわれが考える4元素—水・土・火・大気—に山尾は「木」を加え、「5元素」を書く。詩人は木々がどれだけ基本的で本質的なものかを示したかったのだろう。

「びろう葉帽子の下で」(ASLE-Japan 70)では、次のように書いている。「じゃがいもを 掘る／物言わず じゃがいもを掘る／(チェルノブイリの灰降り)」。このように、じゃがいもを掘ることとチェルノブイリを並置することによって、異質なふたつを比較するように促すのである。「チェルノブイリ」といえば死と荒廃を想起させるが、「じゃがいも」は多くの人にとっての主食である。人類がかくも無残な状況にあつてさえ、じゃがいもを掘り、生命を救いたいと告げているようだ。

3. 宮沢賢治を読む—ふたつの世界を越境する(KANG Yeon Haun)

宮沢賢治は日本文学におけるもっとも傑出した作家のひとりであり、一貫して動物や植物あるいは無生物の事物のような、周縁化されたものへ愛情を注いだ。岩政伸治氏が指摘するように、賢治作品は他者への並々ならぬ共感に貫かれている(ASLE-Japan 72)。「なめとこ山の熊」について、二つのテーマ—狩りと言語帝国主義—に沿って論じてみたい。

第一に、「なめとこ山の熊」の狩りはどのように理解すればいいだろうか。小十郎は生計を立てるため熊を殺すが、作者は彼に暖かい眼差しを向けているように思われる。この点について、賢治は小十郎の狩りを黙認していると推測する。例えば「注文の多い料理店」に登場する、狩りを楽しむだけの2人の男とはちがって、小十郎は生計のために熊を殺すのではなく、動物たちへの共感を示している。それ故、彼の狩りは容認されていると考えられる。とはいえ、これは人間が動物よりも高い法則をもっているということではない。賢治は「布施」の考えを通じて、人間と動物の理想的な関係を措定しようとする。また、小十郎の狩りは、アルド・レオポルドの「山の身になって考える」とソローの『ウォールデン』を思い出させる。本発表では、これらの文学作品における狩りの問題を考察したい。

第二のテーマは言語帝国主義である。「なめとこ山の熊」では興味深いことに、熊は小十郎の話す言葉を理解し、話しさえしている。表面的には、人間と動物という異なる2種間のコミュニケーションが問題なく行われている。だが、この表現方法を「神人同型論／人間視点主義(anthropomorphism)」と捉えることもできよう。動物たちから言語を剥奪し、人間のイデオロギーを押し付けていると考えられるからだ。他に賢治作品「よだかの星」や「どんぐりと山猫」を読むと、言語帝国主義が人間にとっての自然探求の中核にあるとわかる。その足跡をいくら否定しようとも、賢治は「なめとこ山の熊」において人間と動物の相違を打ち消す手段として anthropomorphism を用いていると考えられる。

要するに、賢治は作品を通して自由にふたつの世界を越境しようとしている。人間、動物、世界中のあらゆる事物、その全てが、巨大な生態系のコミュニティの一員である。したがって、全てのものが互いに深く結びついていると結論することができる。

参考文献

安藤忠雄. 「私と環境」. 『朝日新聞』2006年5月28日, 全国版朝刊.

ASLE- Japan, ed. *Japanese environmental literature: Selected works for reading workshop ASLE Japan-Korea Joint Symposium*. ASLE- Japan, 2007.

バルト, R. 『神話作用』. 篠沢秀夫訳, 東京: 現代思潮社, 1976.

日本国法務省. 「平成18年における外国人入国者及び日本人出国者の概況について(速報)」2007年1月12日. 日本国法務省. 2007年4月27日. <<http://www.moj.go.jp/PRESS/070112-1.pdf>>.

「韓流ブーム 今は昔? 日韓関係『良くない』57% 内閣府調査で過去最高」. 『朝日新聞』2006年12月10日, 全国版朝刊.

金應教・佐川亜紀. 「対談 新芽は二つに分かれて育ちます—より深い理解と交流に向けて」. 『詩と思想』土曜美術社, 200(2002), 15-23.

Kim, Won-Chung, ed. and trans. *Cracking the Shell: Three Korean Ecopoets*. Paramus, NJ: Homa & Sekey, 2006.

Martin, Judith N. and Nakayama, Tom. *Intercultural communication in contexts: Third Edition*. New York: McGraw-Hill, 2004.

周婉窈. 「『図説 台湾の歴史』日本語版への序文」. 『月刊百科』平凡社, 534(2007): 33-35.

Wu, Chan. J. "In Search of the Old Future: The Ecological Imagination of Korean Poetry." Introduction. Trans. Kim. Kim xi-xxvii.